

山の中の男 イーシャ・サーデサイによる再話

昔、もううんざりして、世間から少し離れるべきだと思ったガヤウという名の男がいました。彼は職場での誤解や家族のいざこざ、人々を彼の意見に添わせるための日々の奮闘に疲れてしまったのです。彼の助言者でもある友人に苦しい胸の内を話したところ、その友人は自然の中で長い散策をしたらどうかと勧めてくれました。静寂な山や森、うららかな湖や川——それはガヤウの精神にとって良いことでしょう。彼の心にのしかかる重荷をいくらか和らげてくれることでしょう。

ガヤウはこの考えが気に入りました。「そうだ」と、彼は考えました。「心を乱すものやいら立たしいものすべてから離れ、独りで自分の時間を過ごすほうがずっと良い」

ガヤウは南米の先端にあるパタゴニア近くの小さな町に住んでいました。彼が探検するための自然の美はあふれるほどありました。彼はすぐに出発し、太陽に照らされた丘陵を通過して、青緑色のジグザグな小川に沿ってぶらぶらと歩きました。数歩ごとに歩みを止め、遠くの山々に見とれました。荘厳な山頂、風雨にさらされた岩肌の溝が、彼に安心のメッセージを運びました。そこには、ただ、彼、ガヤウと偉大な自然だけがあった。人生は万事順調でした。

ハイキングを始めて数時間後、ガヤウは柔らかい草で覆われた休める小山を見つけました。ここからの眺めは実に理想的なものでした。彼の左には紫色の花々を付けたルピナスの小枝がありました。後ろには壮大な山々の頂、そして上には——一面の青いキャンバス。雲一つありませんでした。

もちろん、それが現れるまでは。ガヤウは草の上に寝転び、午後の日差しの暖かさを顔に感じていました。その時、彼は頭上に、どンドン流れてゆく大きな綿のような塊を見つけました。少しして、それが太陽を遮りました。

「おい！」と、ガヤウは言いました。「おい、雲よ、やめろ。あっちへ行け！」

すると、丘陵の向こうのどこかから、音が聞こえました。

「行け、行け、行け…」。それは誰かの声のように聞こえました——山のどこかにいる男が、誰かにもしくは何かに叫ぶ声のように。

好奇心で、ガヤウはこの男に大声で呼び掛けてみようと思いました。

「そこにいるのは誰だ？」

「そこにいるのは誰だ？ そこにいるのは誰だ？ 誰だ、誰だ、誰だ、誰だ…」

「そうじゃなく、本当に、おまえは誰だ？」

「おまえ、おまえ、おまえ、おまえ、おまえ…」

「私ではない、おまえだ！」と、ガヤウは腹を立てて怒鳴りました。ああ、この山の中の男は本当に鈍い！

「私、私、私…おまえ、おまえ、おまえ…」と、その声が答えました。

「なるほど、彼は今ただ私をからかっているのだ」と、ガヤウは考えました。「今に見てろよ」

そこでガヤウは肩を後ろに引いて、胸を膨らませ、最も断固とした真面目で大きな声で言いました。

「それをやめなさい！」

悲しいかな、山の中の男には準備ができていました。ぴったりのタイミングで反応がありました。

「それをやめなさい、やめなさい、やめなさい、やめなさい……」

もはやガヤウには手に負えませんでした。「アアアアアーーーーーツツツツツ！」と、ガヤウは叫びました。

予想通りの答えが返ってきました——「アアアアアーーーーーツツツツツ」——しかし、その時までにはすでにガヤウはその男をののしり始めていました。その男を説得しようとしても全然うまくいかなかったのですから。

「ばか野郎！」と、ガヤウは叫びました。「不愉快だ！ 能無し！」

ののしりは、もちろん、音量も不快な音調も 100 倍にもなって、こだまして彼に返ってきました。ガヤウは怒りと混乱の中で、周りを見ました。数分前にはとても魅力的だった丘や山々は、きつい声の調子とその硬い前面に跳ね返り、今や彼を圧迫しているように見えました。

「よくまあこの男は、私に対してこのように話せるものだ」と、彼は思いました。「この私——ガヤウに！ それに、彼のしたことを見てみるがいい！ この美しい場所を彼は台無しにしてしまったのだ」

最後にもう一度、山々を苦々しく見て、ガヤウはきびすを返して真っすぐに家に向かいました。歩きながら彼はブツブツとつぶやいていました。ハエの群れのようにさまざまな考えが頭の中でざわめいていました。心臓の辺りが圧迫されているように感じ、その辺りに突然現れた何百万もの見えない障壁によってゆがめられているようでした。

かなり長い時間がたって、家へと続く砂利道にたどり着きました。そこを歩き始めると、反対方向から彼の方へ向かって友人がやって来るのが見えました。

「ガヤウ!」と、友人は言いました。「ちょうど君に会いに来たところだったのだよ。散策から戻ってきたか確認するためにね。ちょっと待った、一体どうしたんだい？」友人はガヤウの顔つきを見ました。彼が行ってきたばかりの山々と同じくらいに無表情だったのです。

「信じてもらえないと思うよ」と、ガヤウは言いました。何が起こったのか、どのように山の中で自分のことに専念して自然と一体となっていたところに、この無礼な他人が邪魔をしてきたのかを説明しました。

ガヤウの友人は熱心に聞いていました。笑い出さないように唇をかみながら。少しの間、彼は何も言いませんでした。そして、ガヤウの両肩に手を置きました。

「ガヤウ」と、彼は優しく言いました。「もう一回試してきたらどうだい？ 山に戻って見たら？ そこにいるのをどれだけ好んだか、君自身も言ったじゃないか？ いや、その不幸な…えーと…この山の中の男との出来事が起こる前のことだけだね」

ギャウはもう口を開け、激怒して答えていました。友人はただ笑顔を浮かべて、話が続く前に手を上げました。

「ギャウ、違いは、今回行く時は、気分を高揚させることを言ってほしいということなんだ。君が聞きたいこと、君が誰かに言ってほしいと望んでいることを言うんだ。もしそうしたら、山の中のこの男は、君をそれほど悩ませないという気がするよ」

ギャウは不意に黙りました。片方の眉を上げました。この考えに確信が持てなかったのです。しかしそれから、失うものはあるだろうか、と彼は考えました。山の中の男にしろ、町の誰かにしろ、いずれかが彼を悩ませました。少なくとも、山の中では、彼はもっと景色を楽しむことができました。

そこで彼は、最初の時よりも興奮は間違いなく冷めていましたが、重い足取りで戻りました。やがて、以前に休憩した草で覆われた小山の同じ場所を見つけました。左側にはルピナスの花々があり、真上には、広大な青空がありました。彼は腰を下ろし、落ち着くのに少し時間を取りました。呼吸が体中を動いているのを感じました。彼は、色彩と質感からなる素晴らしい全景を見渡しました。

胸の中にある何か——そこにあることに気づけなかった硬いもの——が解き放たれ始めました。「美しい」と、彼は山を見詰めながら穏やかに言いました。

そして、ギャウは友人の助言を思い出しました。

「美しい」と、彼はもう一度言いました。今度は、もっと大きな声で、山々や丘陵に聞こえるように。

「美しい」と、天使のような声が歌い返しました。「美しい、美しい、美しい、美しい…」

ガヤウの顔にほほ笑みが浮かびました。なんと耳に心地よい音でしょう！ 声に出して聞きたかったあらゆる素晴らしい考えや、自分に向かって誰かに言ってほしいと望んだあらゆる優しい言葉を考え始めました。次々とこれらを声に出して言いました。次第に彼の声はより熱心に、我を忘れたものになっていきました。毎回、山の中の男は歌い返してきました。あるいは、それは山々自体が歌っているものだったのでしょうか？ それは、真上にある空、あるいは、真下にある大地だったのでしょうか？

音がガヤウを取り囲み、彼の存在を駆け抜けた時、彼の思いは、山をもう一度訪れるように助言してくれた友人であり助言者に向かいました。ガヤウはこの賢く揺るがない友人に対する愛情が高まっていくのを感じました。そして感謝の表現が彼の口に上りました。実際、彼の人生で出会ったあらゆる人々についても、新しく得た親しみを込めて考え始めました。そして、彼らに対するあらゆる賛辞、感心する彼らの資質や、彼らがいる時に感じる良い感情を言葉に出しました。

山中にポジティブ(肯定的)なものがあふれ、鳴り響きました。その無数の音が、まるで天上の風鈴のように互いにさざめき合いました。この音の振動の持つエネルギーはあまりに強力で明らかで、ガヤウは手を伸ばし触れたいと思いました。

そこで、そこに立ち、山の中のこの男は目の前に大きく広がるパタゴニアに向かって腕を伸ばしました。彼はそこに立ち、そのマインドは音楽の中に浸りました。彼はそこに立ち、そのマインドは静けさの中に没入しました。

